

国際平和は食から

- 代々受け継がれてきたおもてなしの心 -

ま ち はくしょう
馬遅 伯昌

聞き手：佐多保彦 株式会社東機買 代表取締役社長

佐多：馬さんはいつもお会いしても若々しくて、本当にすてきですね。生活の中で特に気をつけておられることはどんなことですか。

馬遅：ありがとうございます。でも特に何もしていません。運動もほとんどしません。その代わり、何でも食べます。私の母は113歳まで生き、100歳の誕生日にはレーガン元大統領からお祝いのサイン入りカードをいただきました。私が作った薬膳スープ（*）は欠かさず飲んでいましたが、好き嫌いなく何でも食べて、健康のためとすすめても、脂のないお肉はおいしくないと言って受けつけませんでした。私も薬膳スープは飲んでいますが、基本的に脂が多いとかカロリーを気にせず、何でも食べるようにしています。内面を豊かに、毎日栄養バランスのよい食生活を日常生活の中で整えることが、健康に過ごせる秘訣と言えます。

佐多：まさに医食同源ですね。馬さんは世界中で何冊も中国料理の本を出版されていますが、やはり多くの方に中国料理のよさを知っていただきたいというお気持ちからだったのでしょうか。

馬遅：戦後日本に家族で移り住み、主婦として家族のために一生懸命料理を作り始めたのです。それを自宅へご招待した方にご馳走しているうちに、作り方を教えて欲しいという方が私の家に集まるようになりました。元宮家の方々や、欧米各国大使館の奥様方に毎月1回料理をお教えしていたのですが、そのうちに教える料理がなくなってしまいました。それで自分で一生懸命勉強して献立を増やしていくうちに、2年経てみると200種類にもなっていました。それをまとめて本にし、『中国の家庭料理』という本を出版したことがきっかけでした。

また、多くの方のすすめで英語版、仏語版、日本語版も出版されて、あわせて21冊出版したことになります。母はよく口癖のように、「中国料理のすばらしさを世界中の一人でも多くの人に伝えなさい」と言っていましたので、世界中で私の本が出版されたことはとてもうれしいことでした。

佐多：映画俳優のダニー・ケイさんは日本に着くと馬さんのお料理



馬遅 伯昌 / まち・はくしょう

1919年生まれ。中国ハルビンの実業家運家に生まれる。父君と親交の厚かった尾崎行雄氏のあっせんにより、日本の自由学園に留学。戦後再来日し、料理を通して文化交流に役立ちたいと、元宮家、欧米各国大使館ほか多数のグループに中国料理を指導。著書に『中国の家庭料理』など日・英・仏で多数。テレビなどにも出演し、各国で好評を博す。東京都港区「シャトー三田」に「華都飯店」を経営。

を楽しみに直行されたそうですね。

馬遅：私の本をきっかけに全米で中国料理がブームになったときは本当に驚きました。全米各地を講習会とテレビ出演で回って歩いたほどです。

ダニーは、私の英語版の本を読んで中国料理を作り始めたそうで、ロサンゼルスでのビバリーヒルズの自宅に私たち家族を招待してくれたこともありました。私たちが到着すると、ダニーは自ら腕をふるって9品の中国料理を用意してくれました。驚くほどおいしい料理でした。どうしたらこんなにすばらしい味がでるのかとしくしく尋ねましたら、笑って「料理にはソースと同時に愛情も加えることが必要だ」と彼一流の料理哲学を披露してくれました。また、一緒にいた友人が、彼がテレビに出ると1分間1000ドルにもなると言いましたら、彼は「友情のために使った時間は100万ドルよりも価値がある」と言ってくれて、今でもその言葉は忘れられません。

佐多：先日は女性ばかりの料理教室にお招きくださってありがとうございました。

馬遅：今は女性を限定にして、毎月1回料理教室を開いています。そのほかに、三笠宮殿下に名誉会長を務めていただいて、「^{シャトー}華都美食会」と称するグルメの会を開いています。

私が『馬家の中国名菜譜』を出版した際には、友人と料理教室の方々が発起人となって出版記念会を開いてくれました。三笠宮殿下が乾杯の音頭をとってくださり、またアメリカ大使やドイツ大使ご夫妻など多方面からたくさんの方々にお祝いいただいて、とても感激したことを覚えています。

佐多：馬さんのお話を伺っていると、誠に国際親善食大使そのものですね。



「華都飯店」：東京都港区三田2-7-1 シャトー三田
Tel 03 3453 0893・7092

馬遷：料理を通して交流が広がり、そして国際平和が実現できればと思うのです。おいしい料理と一緒に食べると、いくら争いをしても仲直りできるでしょう。国際紛争の報道などを聞くと、料理を持って駆けつけてしまいたくなります。

中国では家族の祭壇の両側にはある詩書の字を代々一つとして命名しますが、私の孫たちの名前も中国風に名づけました。ちょうど「誠」の字に当たったので、誠中、誠徳、誠日、誠美、誠瑞、誠英、誠智をつけました。中は中国、徳はドイツ、日は日本、アメリカは美、スイスは瑞、イギリスは英、南米のチリは智ということで、みなが誠実に愛し合い、世界の平和を呼びかけるようにとの希望を託して名づけました。

また、私は食を通して人の健康に役立ちたいと考えています。医療機器を通して人の心身の療養を考えていらっしゃる佐多さんと、目的は同じですね。私は人が健康であるために努力し、人が健康を害したときに、今度は佐多さんが回復のために努力されるというように。

佐多：^{シャトー}ありがとうございます。三田に「華都飯店」を経営していられしゃいますが、私も大学時代から時々行かせていただいています。お昼はいつ行っても大勢の方が並んでいて大人気ですね。

馬遷：子供たちがそれぞれ独立したので、合理的なマンションに移ろうということになり、「シャトー三田」を購入しました。そのときに、たまたま友人からシャトー三田の1階にお店を開かないかとすすめられたのです。お店を経営するのは初めてでしたので、主人には随分と反対されましたが、料理教室の方々からも応援されて決意しました。軌道に乗ってからは、主人も友人をたくさん連れてきてくれて、次第に利用してくださるお客様の交友の輪が広がっていきました。そうして多くのすばらしい方々のご友情に支えられて、なんとかここまでやってこられました。今でも自分の食堂のような感覚があって、なるべく機会を見つけては店に顔を出し、お客様におもてなしをしたいと考えています。

佐多：やはり家庭の中で自然とおもてなしの心というものを学んでこられたのでしょうか。

馬遷：私の生まれた運家は、四世代50人が同じ屋根の下で生活していました。当時の中国では、一族五世代が助け合って共同生活を営むことが理想だったのです。毎日学校に行く前に、両親から必ず一つ格言を覚えさせられました。「食者民之本也、民者国之基也（食は民の本であり、民は国の基本である）」というように、食に対する意識が芽生えたものこのころからです。

さらに、私は中国東北部のハルビンで育ちましたが、当時のハルピンはシベリア鉄道でヨーロッパとつながっていて、東方のパリと呼ばれていました。亡命してきたロシアの宮廷貴族たちも多く、とても国際的な都市でした。中国金融界の要人だった父の仕事の関係で、来客のない日は1日となく、お客様の顔ぶれも東洋、西洋とさまざま。こうした家庭環境の中で、母が日常の生活を通しておもてなしの料理や作法を教えてくれた経験が生かされているのだと思っています。西洋では「客が一人増えたらスープに水を足す」という諺があるそうですが、母は「中国料理は急な来客があっても箸さえ増やせばよい」とその長所を教えてくれました。また、中国の伝統ではお客様を空腹のままお帰しするのは一番失礼なことだとも教えてくれました。

佐多：ヘレンさん(次女)やお孫さんの衣真さんが料理研究者として活躍されるなど、しっかりおもてなしの精神は引き継がれておられるんですね。

馬遷：子供たちがそれぞれの家庭に合った味つけを開発しながら、また料理を通して新たなおつき合いの輪を広げていくのをうれしく思っています。

中国料理は「色香味俱全」とよく言います。見た目に色が美しく、香りがよく、味もおいしく、それらが一体となって初めて完成します。目、鼻、舌をフルに使って楽しみましょうということです。これからも多くの方に、中国料理のよさを知っていただきたいと思います。今考えていますのは、漢方を駆使した薬膳中華の会を開くことです。佐多さんにもぜひ手伝っていただきたいですわ(笑)。

(*)馬さんの協力の下、布電株式会社商品化し、販売している。病気の予防と健康を守るために、体にやさしい漢方を使ったスープ。「華都飯店」でも販売している。

「唯識」という生き方(3) —最終回—

横山 紘一



横山 紘一 / よこやま・こういつ

1940年、福岡県生まれ。70年、東京大学大学院印度哲学科修了。現在、立教大学教授。
著書に、『唯識の哲学』『唯識とはなにか』『「唯識」という生き方』『唯識・わが心の構造』
『十牛図・自己発見への旅』など。

2. 無分別智

前回「成りきる」ことについて触れましたが、このことについて考えてみたいと思います。

白隠禅師の「坐禅和讃」の中に、「一坐の功を為す人は、積し無量の罪滅ぶ」という一句があります。これは、一坐すなわち、わずか30分でも坐するとそれまで身についた無量の業の汚れがなくなってしまうという意味です。なぜそうなのか。これを唯識的には、「表層心の無分別智の火によって深層心すなわち阿頼耶識の中にある汚れた種子が焼かれて朽ち、心が深層から浄められる」と解釈することができます。これは、表層の心が深層心を浄化することになるという考えです。唯識の経論の各所に「無分別智によらないかぎり心は浄化されない」と力説されています。私も本当にそうだと確信しています。第1回目、若いとき円覚寺で過ごしたわずか1週間の生活が私の心のありようを変えたという体験を述べましたが、いまから考えると、無分別智がそのように私を変えたのであると言えるでしょう。

「無分別智」とは、何事をするにしても「自分」と「他者」とその両者の間に成立する「行為」との3つを分別しない智慧のことです。例えば、私がある人に布施をするという場合に、自分は物を施す「施者」であり、受け取る人は「受者」であり、その2人の間に「布施」という行為があると考えますが、その3つを考えることなく、行為に成りきって布施を行うところに無分別智が働いてきます。確かに私たちは普通、それをはっきりと意識しないにしても、物を他人に与えたことによって相手に施しをしたのだという多少なりともおごりの気持が起こってきます。ここが恐ろしいところです。人に物を与えるという利他行によって逆に自我意識をより強めることにもなりかねないからです。だから、そのような思いで布施を行うのではなく、施者も受者も布施する行為も分別しない無分別智をもって布施を実践することを唯識は要請するのです。

この無分別智による行為は2つの働きをします。1つは他者に対して真に清らかな行為を展開します。もう1つは、前述したように、それがいわば火となって自分に跳ね返り、自分の深層の心すなわち阿頼耶識の中にある汚れた種子を焼き尽くしていきます。いま「火」と言いましたが、本当に無分別智という智慧は火の如きものです。ロウソクが燃えることを例にとってみましょう。ロウソクが燃えるとき2つ

のことが起こります。1つは明かりと熱を出す。もう1つはロウソク自体が燃え尽きていく。この喩えのように、無分別智という火を燃やして行為をするとき、それによって生じた熱が他者に対する慈悲の行為となっていくと同時に、自分の中にある煩惱というエネルギーが燃えて焼き尽くされていくことになるのです。これは本当に科学的な捉え方です。人間の心の働きもやはり自然の理に即しているのです。人々の中で、自他対立の世間の中で、相手に、行為に成りきって生きていくことによって執拗なエゴ心が削られ、そこにより深い智慧が磨かれ、より広い慈悲行が展開していくことになるのです。

どうしたら執拗な「自分」を、エゴ心をなくすことができるか。それは本を読んでも人から教えてもらっても決してくなりません。それは「自分」をいわば融解させる行為、すなわち無分別智に基づく行為を通してしか果たすことができないのです。このことを信じて、無理でもよい、日常生活の中で、人々の中で、できるだけ無分別智になって行為をするよう努力を続けてみるならば、必ずや深層の心に潜むエゴに色づけされた種子が焼かれ、それによって表層の行為の中から徐々に「自分」への執われの度合いが薄れていきます。ここに実践の素晴らしさがあります。

3. 阿頼耶識縁起

「タバコのポイ捨て絶滅運動」と称して、ここ3年間、私の大学のキャンパス内で、有志の学生と昼休みに捨てられたタバコの吸い殻を拾って歩いています。わずか30分の間に、いつもなんと500本ほどの吸い殻を拾うことになります。現代学生のマナーのなさに、怒りを越えて悲しい気持ちになります。あの外国人にも賞賛された昔の日本人の礼節ある優雅な立ち居振舞いはどこに消え去ってしまったのでしょうか。

人は軽い気持ちでタバコをポイと捨てるのかもしれませんが、しかしその人はその行為がいかに重大な結果を引き起こすことになるかを知っていないのです。まず人間の行為は、1つは他者に対して、もう1つは自己に対しての2つの影響なり結果を生じるということを知る必要があります。タバコのポイ捨てについて言えば、それは、対他的には、路上を、自然を汚して美観を損ね、他者に迷惑をかけますし、同時に対自的には、その行為は必ずその行為者の深層心を汚すこ

とになるのです。タバコを捨てる人は、それほど意識していないにしても前者の結果には気づいていることでしょうが、後者のその行為が自己を心底から汚れているということには気がついていません。本当にいかなる行為であろうとその行為は自分に跳ね返ってきて、深層にその影響を与えます。タバコを捨てるという表層の濁ったありようは必ず深層の心にいわば濁った種子を植えつけ、それが知らず知らずのうちに深層で成長発育して表層に芽をふき、濁った心が再び生じるのです。このように表層心と深層心とが相互に因果関係にあることを、唯識思想では「阿頼耶識縁起」と言います。これも前述した縁起の理の1つですが、静かに心の中に住して心のプロセスを観察すると、この阿頼耶識縁起という理が生きて働き働いていることに気づきます。そしてこの理に気づくならば、いかなる行為もあるそかにすることはできなくなります。こんなことぐらいと吸い殻をゴミと捨てる、人に分からないにしてもある人を憎いと思う、そのような行為や思いが度重なるにつれて、その人の心は心底からますます汚れ濁っていくことになるのです。本当に恐ろしいことです。

1つの行為がもたらす影響の重大性を説く「阿頼耶識縁起」説の宣揚が必要になった時代であると私は痛感しています。

4. 菩薩道

民族、風習、伝統、言語などがいかに違っていても、人間に共通の普遍的な目的があります。それは「幸福」を追い求めるという目的です。しかし人間は多くの場合、その幸福の求め方が間違っているために、いつも歴史は不幸な出来事の連続であったと言っても過言ではないでしょう。

授業の中で学生たちに「どういときに幸せを感じるか」という質問をしますと、「好きな音楽を聴いているとき」「スポーツをしているとき」「親しい友人と語り合っているとき」云々と答えてきます。これらを分析すると、それらはすべて幸福と感じる感情であり、しかもそこにはそのように感じる「自分」という存在があります。そこで学生たちに、幸福であるという状況の主人公はいつも「自分」であるのではないかと、自分が幸せであることが本当に幸福であるのか、と問いたですことにしています。

もちろんそれは世間でいう幸せの一部であるかもしれませんが、

本当の意味で、もっと正確に言うと、深い充実した意味での幸福であるかどうかを再考察してみようではないかと学生に訴えています。

前回一人一宇宙（一人唯識）という事実を指摘しました。一人が1つの世界の中に閉じ込められ、お互いに存在的に分離した、だからこそ孤立した寂しい存在です。でもこの事実気づくとき、私たちは、だからこそ相手の立場なり状況を思いやる気持ちが湧いてきます。いまこの自分の世界は苦しい。それを実感し、そして一人一宇宙という事実を思い出して、眼前にいる他人が同じく苦しんでいるのを見る。そのとき、「この自分の苦しみと眼前の人の苦しみとのうち、どちらの苦しみをまず取り除こうか」と静かに深く考えてみると、不思議なことに、自分はどうでもよい、まずはその人の苦しみをなくしてあげようという気持ちがだれもの心の中に生じてくるものと私は信じています。

私は最近、存在の深い層から見れば、人間は本来だれしもが菩薩であると確信するようになりました。「菩薩」とは、「いったいなににか」という追求心を持ちつつ智慧を深めていきながら、同時に生きとし生けるものを救済しようと慈悲行を展開する、まさに理想的な人間です。釈尊は、仏陀になる以前にはそのような菩薩として生まれ変わり死に変わりして生き続けてこられたという信仰が、弟子たちによって生じました。「釈尊が菩薩として生き続けられた間に、人々に与えた骨の量はスメール山よりも高く、与えた血は四大海の水の量よりも多い」という原始經典の文句を読むたびに、私は感動を覚え、同時に自分のエゴ心の強さを恥じています。

もちろんこれは、弟子たちによって作られた物語ですが、しかしこれこそが、最高に理想的な、そして前述した深い意味での幸福を実現している生き方ではないでしょうか。

「菩薩の道を歩む」、言葉は仏教的な表現ですが、これは人類に普遍的な「人の道」であると私は信じるようになりました。前にも喩えとして出しましたが、ローソクの火は明るさと暖かさを与えながら燃え続け、そして最後に燃え尽きてなくなっていきます。私も、ローソクのように、与えられ、生かされてあるこの「いのち」というエネルギーを燃やし、明るさと暖かさを与え続け、そして最後に燃え尽きていくぞ、と自分に言い聞かせています。

「唯識」と「菩薩道」の宣揚——これが私に残された人生の目的です。

転倒骨折の体験を 乗り越えて

—患者体験談—

花田 克彦



高齢層の転倒骨折の事例が、最近特に多く見られるように思う。かいう私自身も、そのような体験を乗り越えて、現在はりハビリに精を出している毎日である。

忘れもしない平成13年5月31日、この日はたまたま私用で会社を休んでいたが、車で出かけようとして会社に置き忘れた鞆の中に免許証が入っていることを思い出し、午後3時ごろ会社に向かった。中に入ろうとして出入口前のわずかな段差のついたコンクリートに右足の爪先がひっかかり、そのまますぐ前方へコンクリート面に叩きつけられるようにして転倒、数秒間だが一瞬気を失った。かなり大きな音がしたらしく、気がついたときには建物の中にいた数人が飛び出してきて、倒れた私の横でただ呆然と立ち尽くすといった状況であった。

私自身気がついて立ち上がろうとしたが、左肩が全く動かない。右手で左肩の肩甲骨をぐっと押してみたが痛みはそれほどもなく、その下に指が2本ほど入る隙間があるような気がしたので、とっさに脱臼だと判断した。実はこれが後々大変な思いを引き起こすことになるのだが、若いころ色々なスポーツをやっていたので、何度も経験したことであったし、すぐに友人の接骨院に連絡をして社員の車で向かった。しかし渋滞に巻き込まれ、転倒してから1時間以上経過しても到着しない。この間車中での苦痛は口では言い表せないほどのもので、何度も気を失うのではないかと思ったほどだ。

やっと接骨院に着き、友人にすぐにはめてくれと伝えて施術してもらった。ガクッという音がして、ぶら下がっていた腕が正常に戻った気はしたが、全然痛みが治まらない。少しおかしいのではないかと尋ねたところ、どうも角度がおかしいのでもう1度入れ直してみようということになり、1度はめた関節をはずして再度試してみた。しかし、どうしても痛みが激しく、動かすこともできないほどで、これは整形外科でレントゲン検査をしなければだめだということになり、紹介してもらった外科医院に向かうことになった。

診察の結果、こんなものをよくも2度にわたってはめこんだものと、先生があきれた様子でおっしゃった。状態を聞いてみると、左肩関節の骨頭およびその周辺の骨はバラバラになっていて、復傷した関節の骨頭は90度角度を変えてはまっていたとのことであった。これはもう小さい医院では手術は無理だということで、紹介状を持って

翌日天理市内にある「天理よろづ相談所病院(愛称・憩いの家)」に行くことに決め、ようやく帰宅したときはすでに夜の9時を回ったところであった。その夜は一晚中横になることもできず、椅子に腰掛けて一睡もしないまま、翌日天理よろづ相談所病院の整形外科に出向いた。ここでの出会いが、その後多くの貴重な体験を得るきっかけとなった。

担当は整形外科副部長の西松秀和医師であった。西松医師の最初の一言が、「これはもうどうしようもない」であった。骨頭がバラバラで、既に自分の骨で修復は不可能であったし、手術の方法は少し考えさせてくれということであった。

私自身どうなるのだらうという不安を抱えたまま、数日が過ぎ、西松医師から手術について説明をするから家族と一緒に来てほしいという連絡があった。私としては別に命にかかわるような怪我でもないし、なぜ家族まで呼んで説明をする必要があるのかと不思議に思ったが、家族を連れて出向いた。西松医師の説明によると、左肩関節部分が骨頭を含め周辺の骨もバラバラの状態なので、骨頭部を人工肩関節に換える以外に方法はないとのことであった。それはもう仕方のないことだと思ったが、過去にも数例の人工肩関節置換手術の事例はあるが、結果の満足なものは少なく、正直言ってあまり自信はないとの話であった。ただ最近新しい人工肩関節が出て、これが非常によい結果を出しているの、これを使ってみようと思うとおっしゃって見せていただいたパンフレットの写真が、(株)東機貿から出されたという輸入品の人工肩関節であった。ゴルフのドライバーを小さくしたような形で、私のような素人には今まで人工肩関節とか骨頭など耳にしたこともない言葉であったし、実際に写真を見て、これが私の体内に入るのかと思うと少し不気味な感じがしたのも事実である。ただ、本職の西松医師がこれしか方法がないとおっしゃるのであれば仕方のないこともあるし、すぐに承諾した。ただし、人工肩関節を入れるにしてもそれを支える私自身の骨の状態が一番問題で、年齢も年齢だし、もしも骨が弱ければ置換手術が不可能ということも考えられるので、この場合は諦めてほしいとのことだった。諦めるというのはどういうことかと尋ねたところ、左腕の回復はもはや不可能であり、バラバラした状態のままになってしまうだろうという過酷な宣告を受けた。



花田 克彦 / はなだ・かつひこ
1931年、大阪に生まれる。49年、大阪府立城東工業高校電気科卒業。73年、株式会社花田電気商会を設立、現在に至る。

西松医師の指導のもと、
自分用に製作したリハビリテーション器具



フランストルニエ社製 エクリス人工肩関節

このときになって初めて、自分が実は大変な怪我を負ったのだということを痛感した。しかし、ここまでくればいくら考えても無駄であるし、西松医師に全てを任せてお願いしますということで、それから数日後の6月12日に手術をすることが決定した。それまではただ痛みを我慢するだけの日々で、あまり心配もせず、なるようになるだろうと考えて毎日を過ごした。ここまで怪我をしてから数日間、接骨施術、入院日から手術の日まで、痛いという言葉に口にしなかった私に接骨医の友人も驚いていたが、この辛抱強さは戦争の経験によるところも大きい。戦前、戦中毎日のように空襲に遭い、12歳のとき空襲による怪我で左足を13針も縫う手術を麻酔なしで受けたことがあった。このときも痛いという言葉を一言も発せず、医者を驚かせた。昭和一桁生まれの頑固さと強情さを今も持ち続け、功罪相半ばしたが、これが私の一生でもあるのだろう。

ただここで特筆したいのは、入院中、この総合病院での看護婦さんたちの献身的な看護、優しさである。憩いの家独特の宗教の心がもとにあるとはいえ(※)、これだけの奉仕精神を教育された諸先生方にはただただ頭の下がる思いがした。これだけ大きな病院で、数知れぬほどの勤務者を教育できる組織が存在するのを実体験して、私自身小さな組織の長として自身の怪我以外に大きな教訓を得た思いがする毎日であった。

そして手術の日を迎えた。8時過ぎに病室を出て9時から手術が始まり、終えたのは午後1時ごろだったと思う。その日の夕方、西松医師から「手術はうまくいったよ」と言われ、骨も筋肉もしっかりしていたと聞いたときには、若いころ鍛えぬいた効果が今でも残っていたなと思ったものである。

その後この西松医師は、さすがに前述した看護婦さんたちの上に立つ人だけあり、忙しい診察の合間に、ときには夜の9時10時の帰宅前に、病室に顔を出していただいた。「調子はどうですか」の一言が患者にとってどれだけ勇気づけられるものかを実感する日々であった。さらに、いかに職業とはいえ、一般の社会や私自身のことも含めて、お客さんの立場に立ってという考え方がここまで徹底できるものかと思うと、頭の下がる思いと反省の毎日であったのを今でも感ずる次第である。

現在、手術から1年が経過したが、私の場合、腕を上方へ挙げる

筋力が弱いことや年齢のこともあって、リハビリテーションにはそれなりの時間が必要のようだ(筋力や年齢によって一概には言えないが、通常は3ヵ月～1年間のリハビリ期間を要するようである)。しかし、自分用に製作したリハビリテーション器具を使用したり、プールに通うなどして、地道にリハビリを続け、徐々に腕が挙がるようになってきている。若干の痛みは残るものの、経過は順調だとのことのお話もいただいている。私自身手術を受けたことに対して後悔は全くないし、また手術を受けなければ腕が動かなくなることも考えられたことを思うと、西松医師と新しい人工肩関節に出会えたことを幸運と感じている。今後も、西松医師の名誉にかけて、またこの新しい人工肩関節を開発されているトルニエ社や、これを輸入されている(株)東機貿の期待に沿うべく、私のリハビリへの挑戦を続けていきたい。

終わりに、西松医師のますますのご活躍と、親切な看護婦さんたちへの感謝の気持ちを、この誌面をお借りして申し上げる次第である。また、入院中多くの高年齢者の骨折事故を目にしてきたこともあり、(株)東機貿にはこれからも様々な優れた医療器具を世の中に出していただきたいと思う。さらなる研究努力を期待してやまない。

最後に、編集部として西松医師に花田氏のことをお伺いした際、下記のようなお言葉をいただいたので、ここにご紹介させていただく。

「現在のエクリス・リハビリテーションには、患者がプールを活用することも含まれている。しかし、日本でプールを活用することは設備としても厳しいものがある。花田さんが製作された器具のように、日常生活で容易にリハビリテーションを行えるものがあることが望ましい。花田さんのようなアイデアマンはそうそういないので、リハビリの器具面についても(株)東機貿の努力を期待したい。また、リハビリの方法については医師向けだけでなく、日常生活において継続的にリハビリを行わなくてはならない患者のために、読んで理解しやすい患者向けの資料を充実させるべきだと考えている」。

(※)財団法人天理よろづ相談所病院は、天理教の教えに基づいて設置・運営されている。

風に立つライオンを めざす者たちへ

- 人間の仕事 -

堂園 晴彦

人間の仕事

英語版の朝日新聞に「風に立つライオン」の記事が掲載されると、神戸在住のインド人アルジュン・グプタさんから電話があり、予想もなかった援助の申し出がありました。

自分の妻と娘がカルカッタに住んでいる。マザーテレサの施設の近くなので、ぜひホームステイに利用して欲しいとおっしゃるのです。偶然友人がマザーテレサの施設に行くことになり、早速宿泊をお願いしました。すると、空港まで奥様と娘さんがわざわざ出迎えてくださり、さらに大変温かいおもてなしを受けたそうです。アルジュンさんの家庭は、決して私たちが想像するようなインドの富裕層ではなく、ごく普通のご家庭だったそうです。

友人からその報告を受け、すぐに感謝の電話を神戸のアルジュンさんに入れました。そして、なぜ見ず知らずの私たちにそのように親切にしてくださるのかと質問しました。するとアルジュンさんは、「人にはそれぞれ仕事があります。会社の仕事、父親の仕事、母親の仕事、子供の仕事。堂園さんたちがしようとしている仕事は人間の仕事だから、お手伝いしたいのです」と、話してくださいました。「人間の仕事」という言葉は初めて聞きました。人が人のためにする仕事を人間の仕事というのでしょうか。人の成長を育むような仕事をいうのでしょうか。とにかく、衝撃的な言葉でした。私たちが一番忘れていた仕事が「人間の仕事」かもしれません。「風に立つライオン」の歌詞の中に、

- やはり僕たちの国は残念だけれど何か

大切な処で道を間違えたようですね

とありますが、仕事の向こうに常に人の幸福を見据えていることが本当の仕事なのに、最近の日本人はお金だけを目的に仕事をするようになってしまったようです。アルジュンさんは、「医学生は私の家に泊まればよい。ホテルに泊まるより地元の人の家に泊まったほうが、よりインドを理解できるし、そのほうがお金もかからない」と、おっしゃってくださいました。今回は既に宿泊先が決まっていたので、次の旅からはぜひアルジュンさんのご自宅を利用させていただきたいと考えています。

主人公は100年後の医療改革

「風に立つライオン」に参加した学生の応募動機を読んだり、彼ら

堂園 晴彦 / どうぞの・はるひこ

1952年鹿児島県生まれ。慈恵医大卒業後国立がんセンターレジデント、米国スローン・ケッティング癌研究所短期留学、慈恵医大産婦人科講師、鹿児島大学産婦人科講師を経て、96年「北風に飛んで旅をしている旅人にそっとフロックコートをかけてあげよう」という思想を医療の中で実現するために「堂園メディカルハウス」を設立。理念は「手の温もりとおもてなしのシャワー」。

現在錦ヶ丘幼稚園・保育園理事長。NPO法人「風に立つライオン」理事長。

学生時代実験演劇室「天井桟敷」に在籍。自称「ホラリスト」。

に会うと、「青年よ大志を抱け、すると中年も大志を抱く」というような気持ちにさせられます。理想に燃え医学部へ入学したものの、日常生活に埋没してしまい、理想は遠くへ行ってしまった。そのような時、風に立つライオンの記事を読み、忘れかけていた何かを思い出したようです。

今回8名の学生をマザーテレサの施設に派遣することができました。選考方法は応募動機と私の著書『それぞれの風景』（日本教文社発行）の感想文、それに面接です。北は北海道から東北、東京、京都、大分、宮崎、鹿児島島の学生たちです。面接には、その地の私の友人にお願いしました。面接官は医師だけでなく、新聞記者、小料理屋の大将など多彩な顔ぶれです。今後はあるグループが1人派遣できるだけの寄付金を集めてくださったら、そのグループに選抜していただくようにしたいとも考えています。選考が偏らないようにしたいからです。

「風に立つライオン」の新聞記事が出てから、20数社の放送局からテレビ番組にしたいとオファーがありました。しかし、全てお断りしました。風に立つライオンの主人公は「日本の医療改革」であり、その成果は次の次の次の世に期待しているからです。100年後に期待しています。私が好きな言葉に

1日を楽しむ人は花を活けよ

1年後を楽しむ人は花の種を植えよ

10年後を楽しむ人は木の苗を植えよ

100年後を楽しむ人は人を育てよ

という中国の格言があります。しっかりした体制が出来上がるまでは、映像にすることは控えたいと考えています。

さだまささんからのエール

もう1つ嬉しいことがありました。鹿児島で2月24日さだまささんの演奏会がありました。その前日の夜に食事をするようになりました。さださんは、「風に立つライオンを作るのに15年考え続け、ある時間いて15分で作りました。そして、今ではこの曲は自分の手から離れています。この曲を好きな医師が集まれば日本の医療も変わるかもしれない。風に立つライオンの取り組みはきっと骨太の医師を作るでしょう」と、話してくださいました。そして、「風に立つライオン」の色紙を特別に書いてくださいました。



学生は何を感じたか

- この偉大な自然の中で病いに向かい合えば
神様について ヒトについて 考えるものですね

「インド・カルカッタでの『風に立つライオンの旅』から帰国して、はや1週間。一日一日が当たり前過ぎていく。このギャップに戸惑っているのは、私だけではないだろう。混沌とした街を自分の足で歩き、見て、触れ、感じた毎日は、瞬間瞬間が新しい発見で満ち溢れていた。日中は、日本のかけらも感じさせないような街から新しい情報が目や耳へなだれ込み、夜はホテルのベッドで深い眠りに落ち、朝は興奮覚めやらない頭を抱えて街へ繰り出していた。それは、まるで精神が見えない糸で身体を引っ張っているかのようであった。ほんの1週間ほどではあったが、こんなカルカッタで得た経験を一度に伝えきることはできない」(宮崎医科大学3年 東 秀子)

「施設で出会った患者さんや子供たちの笑顔・手の温かさ・瞳の美しさを思い出す度、言いようのないほどの感謝の気持ち込み上げてきた。マザー・テレサは、『この世の最大の不幸は、貧しさや病ではなく、自分は誰からも必要とされていないと感じることだ』と言う。だから、ずっと路上で誰からも振り返られずに生きてきた施設の患者さんたちに、『私はあなたを必要としているのだ』という気持ちを表して接する。しかし、この旅の中で、その気持ちをもらって満たされていたのはむしろ私のほうだった」(順天堂大学医学部3年 倉繁 朋子)

「日本の現代医療の焦点は、さらに高度な技術・知識を必要とする難病や、長寿化に伴い増加した生活習慣病に移りつつありますが、インドの医療の第一歩は、栄養・衛生状態をよりよくしていくことにあると実感しました。そして、日本に生まれ、健康な体だけでなく、医学の教養まで与えてもらった自分の身を幸せに思い、それだからこそ果たすべき責任があるのではとも考えています」(北海道大学医学部3年 菅野 由岐子)

- 診療所に集まる人々は病気がけんど
少なくとも心は僕より健康なのですよ

「『風に立つライオンの旅』に参加して、どうしても言わなければな

らないことがある。それは、素晴らしい仲間との出会いである。共に働き、悩み、語り合った7人の友に心から感謝している。夜は毎晩のように語らっていた。初日はお決まりのように恋愛話であった。私の悩みもぶちまけた。宗教についても考えた。マザー・テレサの言葉の意味も探った。今回の旅が成功だったと言えるのは、彼、彼女らのお陰だといっても過言ではないだろう。私たちは研修に行かせてもらったのではなく、間違いない研修を自分たちで作り上げに行ったのだった。日本に帰ってきた今、私たちに求められていることは、この経験を独り占めにしないこと。自分の中で語り継ぎながら、社会へも貢献していこうとする姿勢だと思う。社会への貢献を考える際とても支えになっているマザー・テレサの言葉がある。『一隅を照らしなさい』という言葉だ」(順天堂大学医学部2年 堂園 桂香)

- 僕はやはり来てよかったと思っています
辛くないと言えば嘘になるけど しあわせです

小さな波紋が大きなうねりに

学生は全員アルジュンさんの自宅へ招待され、奥様の手料理をご馳走になり、全員が民族衣装をお土産にいただきました。お礼はまたインドに帰って来てくれることだとおっしゃっていただいたそうです。池に投げた小さな石が、徐々に波紋となり広がっている気がします。

- あなたや日本を捨てた訳ではなく
僕は「現在」を生きることに思い上がりたくないのです
空を切り裂いて落下する滝のように
僕はよどみない生命を生きたい
キリマンジャロの白い雪 それを支える紺碧の空
僕は風に向かって立つライオンでありたい

これからの医師を作るには多彩で多様な経験や指導者が必要です。ヴィタリテの読者の方々がその1人になってくださることを切にお願いしたいと思います。

日本音楽著作権協会 出 野誌第0202071・201号

出会い (22)

宋 遼 禪 師

奥村 一郎



「正師を得ざれば学せざるに如かず」：道元禪師「学道用心集」の鋭い言葉。事実、旧制高校時代、若き日に出会った宋遼老師は文字通り、私にとっての正師であり、人生の尊い導師でもあった。そのことについては、すでに数回にわたり、本誌において紹介してきたが（「出会い」第1、2、19回参照）、ここではまたさらに、幾つかの忘れられない小啻をとりあげてみたい。

1. チリチリ花

お寺を訪ねたのは秋も終わりのころだったと思う。厚い緑の杉に覆われた寺の庭には、薄きや野の花が咲いていた。きれいに頭をそった若い雲水さんが玄關に出てこられて、丁寧に老師の部屋に案内してくださった。いつものように、明るい静かな面持ちで迎えてくださる老師は、普段の応接間ではなく、特に、二百年にひとりの傑僧とまでいわれた先代山本玄峰老師のお部屋に案内していた。玄峰老師は学生時代にお会いし、「提唱（*）」にもあづかせていただいたこともあった。2階の部屋でしばらく座って待っていると、老師が出てこれ、いつもの茶道具と、最近、イスラエルの聖地に行かれた時のお土産とか、よく知られた死海の塩でつくられたといわれる羊羹をもって階段を上がってこられた。その時、ふと目をあげると、部屋の入り口の柱につけられた花瓶の小さな野花に気がついた。茎もクニヤとなり花も葉も落ちそう。水が足りないのかな。かわいそうに。禅寺でも男寺だから、世話がゆきとどかないのかな？などと、気を散らしていると、その時、抹茶を私に差し出そうとされた老師もその枯れかけた花に気づかれた。「ああ！あれは“ウグイス花”といいますじゃ。あつ、枯れちよりますな。じゃが、このほうが面白い。踊っちゃうわ！」といわれた。私は、はっと目が覚めたように驚いた。今、枯れて、死んでいく花なのに、その方が面白いという！「踊っちゃうわ」と見る目。毎年、ヨーロッパをまわって聖地の女子修道院での禅の指導に行かれた宋遼老師には、「死即生」「生死一如」の禅的生死観にキリスト教の「死復活」の秘儀が、にじみ出たのであろうか。死は生の終末ではなく、新しい誕生をそこに見る。ある時も、それと違った角度からの話題を出されたことがあった。

「私は、毎年、座禅指導のため聖地に行く時、シスターたちとミサにあづからせていただきますが、本当に素晴らしいと思う。キリスト

教には、まったく素人の私だが、ミサは、祈りの宇宙交響楽とでもいえるのではないのでしょうか!? 間違っていましたら教えてください」といわれた。とんでもない、間違いどころか、文字通りカトリック神学そのままの名言でさもある。それも、草花という小さい自然の姿のなかに、宇宙的規模の大自然の姿を読みとる詩人宋遼老師の心の広さと鋭さを見る思いであった。枯れて死に逝く一本の花のなかに、大地に落ちる一粒の種に秘められた新しい命の鼓動を読みとる。ともあれ、あの時の老師の一言は、狭い私の視野を突き破ってくれた。

2. 羅漢様

もうひとつ別の機会での小啻。美しい霊峰富士山が澄んだ空に見える天気の良い日、いつものように老師をお訪ねしたその時のこと。質素な禅寺の昼食をいっしょにいただいてから、老師といっしょにこぢんまりした奥の院の庭に出て、話しながら散策していた時のこと。老師は厚い鉄板でつくった重い下駄を履いてこられた。歩くのも不自由。勿論、速くは歩けない。禅寺の苦行には、いろいろなものがあることは知っていたが、こんなおかしな苦行があるとはそれまで知らなかった。さすがの老師も、ガッチャンガッチャンと音をたてながら後ろからゆっくりついてこられた。少し先に行くうちに途中で道の両側に立ち並ぶ十六羅漢の石像を見た。羅漢とか、阿修羅というのは、仏教での修行の最高段階に達した弟子のことで、顔も形も皆それぞれ、十人十色。先を歩きながら、ふと気づくと、厳めしく強そうな羅漢さんが大きな鉄棒を驚づかみに握り、一頭の大きな恐ろしい顔の虎を足で踏みつけている像を見た。首ねっこを押さえつけられた虎は苦しうに起き上がろうとして必死にもがいている。私はそれを見思わず、「羅漢さんが虎をやっつけていますネ!」と、後ろからこられる老師の方を向いて声をあげた。すると、途端に「違う!! 羅漢さんは虎と遊んどるのじゃ! 宇宙の調和じゃ!」と老師の大喝一声。私は途端にギョッとした。というも、虎と戦う羅漢さんという風にとったのは、カトリック教会では欠くことのできない大切なマリア信心の絵や像のテーマとして、悪魔を象徴する蛇の頭を足で押しつぶすようにしている女性像（聖母マリア?）を見なれていたからである。すなわち、よく知られた「楽園喪失」の物語の一場面。「蛇と戦う女」の神話的イメージ（旧約聖書の創世記第3章15節参照）宋遼老師

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書漢語法』の生いたち（オリエンツ宗教研究所）など多数。

の視座からすると、そこでは、「虎と遊ぶ羅漢さん」になる。何だか、先の話、「チリチリ花」にもつながってくる。枯れ落ちて死にそうな花が、元氣よく踊っちゃう花になる。虎と戦う羅漢に見えるものが、虎と遊ぶ羅漢に変身。まさに、すべてが宇宙賛歌。戦闘的なキリスト教の神話と、調和を尊ぶ仏教の霊性が円（まんじ）のように交錯した。

以上は、たった2つの小唄なのだが、そこに共通する心の歌があるように思われる。つまり、自然調和の感覚である。個を主張する西欧的メンタリティに根を下ろした宗教は、個の自己主張が強くなりかねない。「剣かまたはバイブルか」。仏教では、「法論は勝つとも負けるも釈迦の恥」ともいわれる。これからの人類の歴史は、すべての相違を乗り越えて「皆がひとつになる」ことこそ、十字架上でキリストがその血を流した痛ましい心願であることも忘れてはならない。教祖は神の子であり、聖者であっても、罪深い人間によって固められる教団により、地上には聖戦の名のもとに悪魔の業としかいえない狂気の殺人が絶えない。まだ一年にもならない、昨年のニューヨークのテロの犠牲者の痛みがよみがえってくる。

読者のご参考として宋洲老師の略歴を添えさせていただく。

明治40年（1907） 3月19日誕生。父助太郎（陸軍軍医）が35歳で逝去

大正12年（1923）17歳 東京第一高等学校入学

昭和4年（1929）23歳 東京帝国大学卒業。このころ、山本玄峰老師に師事

昭和9年（1934） 3月、一高陵祥会発足。木食生活（一日一食）に入る

昭和15年（1940）34歳 陵祥会三昧堂開設。一高後輩の禅教育開始

毎月13日、小接心（13日会）を開く

昭和17年（1942）36歳 龍潭寺第十世住職に就任

昭和24年（1949）43歳 イスラエル、スイス、米国など幅広く国際的に活躍

昭和51年（1976）70歳 ニューヨークにて国際大菩薩禅堂開設

昭和59年（1984）78歳 3月10日午前4時30分遷化（他界）

（*）禅宗において、師が語録を講義したり、宗旨（根本精神）を明らかにする際に、その大要を提起して自在に説法すること。

P.G.I.のお知らせ

・特別チャリティー展

フランコ・メノン 写真展 ペシャワール - アフガンへの門戸 -
Franco Menon "PESHAWAR" - Gateway to Afghanistan -

2002年7月22日（月）～ 8月9日（金）

「ペシャワール会」チャリティー展

昨年9月11日の米国同時多発テロに端を発し、10月8日には米国による軍事報復が始まりました。フランコ・メノンは無名の写真家ですが、彼の写真からはペシャワールにあるアフガン難民キャンプの生の姿が伝わってきます。この写真展では写真を頒布し、その売上金を「ペシャワール会」に寄付させていただきます。メディアでは報道されることのない現地の真の姿を伝えようと、各地で精力的に講演会を行っている医師・中村哲氏（ペシャワール会現地代表）の活動を支援するためのチャリティーとさせていただきます。より多くの方々のご支援とご来場をお待ち致します。

・マーティン・ストゥーピッチ 写真展

Martin Stupich "Elements of Geography"

2002年9月3日（火）～ 10月10日（木）

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦 4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143

JR田町駅芝浦出口（東口）より徒歩10分【入場無料】

【営業日】月～金 【休館日】土・日・祝日

【営業時間】11:00～19:00

* P.G.I.についての詳しい情報はホームページ（<http://www.pgi.ac>）をご覧ください。

表紙の言葉



写真：クリス・スティーラー／バーキンス
アフガニスタン、1996年
写真提供：マガナム・フォト東京支社

教師と生徒たち
タリバンが占領する以前のマザリシャリフで

「...イスラムの初期の歴史のどこかに、キリスト教のなかにでしゃばってきた聖パウロのような妄想にとりつかれた独裁者がいたにちがいない。パウロもまた、キリストから発したはずのないいくつもの禁止令を出し、何世紀もの間、女性を苦しめ、屈辱を強いることになったのだ。進歩的なムスリムたちは、コーランのなかに女性の平等を確立してイスラム教を改革できる箇所がたくさんあるという。たとえば、「女は男の半身である」「天国は母の足下にある」「あるいは「女の財産を取り上げてはならない」などだ...」

『アフガニスタンの風』ドリス・レスリング（晶文社）より

脳の血流を改善する 脳のバイパス手術について

—モヤモヤ病の治療との関連で—

米川 泰弘

私の初回のチューリッヒ滞在は1970年代であるが、その当時1974年にバーゼル在住のスイス人M女史(当時31歳)に脳のバイパスの手術をした。彼女は以後四半世紀もの間中断することなく毎年その手術の記念日がめぐってくる度に、自分がまた新しく誕生した日のように感じると、近況を書き添えて手紙を送ってくれた。私が日本に帰国してから、海を越えてその便りは毎年届いた。彼女は歯科技工士としてバーゼルで働き始めた頃、頭痛と半身脱力発作が頻発するので精密検査のためチューリッヒ大学病院に来院した。その結果右片側の頭蓋内内頸動脈の狭窄が発見された。今から考えると、発病時の彼女の若い年齢からもあてはまるのだが、一側性のモヤモヤ病と考えられる(詳しくは後記)。当時は脳血流の検査方法やCTも発達していなかったので、脳血管撮影の所見からのみ、間欠的に右大脳半球の血流が不十分になると診断した。この手術をした後、脳血流が回復し充分になり上記の発作も消え、元気に職場に復帰していた。その後は定期的に地元のバーゼル大学で脳血管のチェックを行ってもらっていて、日本にいた私にもその報告が大学から届いた。このような形で連絡をとり合うことが続いたので、15、6年前に私が国立循環器病センターで働いていた頃、家族でヨーロッパ旅行をした時には、彼女にベルンの街まで出てきてもらって、美しい街並みのちょっと高台にあるレストランで昼食を共にした。1993年にチューリッヒに帰り教授に就任した折には、早速祝いに駆けつけてくれたことも思い出される。

ところがある日突然、彼女の姉から、M女史が交通事故で意識不明になり植物状態に陥って死を待っているとの知らせが舞い込んだ。この姉君はM女史から私のことをしばしば話に聞いていたらしく、妹が死を迎える前に見舞ってやってくれないかとのことであった。ある日、チューリッヒでひと手術を終えて車で1.5時間ほどのバーゼルへ向かった。街外れの静かなホスピスのベッドに横たわった目の前の彼女には既にいつもの明るい笑顔は見られなかったが、一瞬私のことを認識してくれたような気がした。彼女のバイパス手術に用いたこめかみの浅側頭動脈にそっと手を触れてみると拍動を感じ、四半世紀を経てバイパスが機能していることを確かめることができた。しかしこれが最後の別れとなり、数日後に他界されたとの報せがあった。バイパス手術でQOL(クオリティーオブライフ)が向上し、手術



米川 泰弘 / よねかわ・やすひろ

1939年、三重県津市生まれ。64年、京都大学医学部卒業。

京都大学医学部助教授、国立循環器病センター・脳神経外科部長などを経て、93年より、チューリッヒ大学脳神経外科主任教授。

をしていなければ脳梗塞に陥ったかもしれない状態を防ぐことができ、長年にわたり普通の生活をすることができたが、不幸にも交通事故で不慮の死をとげるようになったケースである。

脳神経外科で取り扱う代表的な病気を大きく分けると(頭部外傷は別にして)1. 脳腫瘍、2. 脳血管障害の2つに分けられる(注: 他に神経系の先天奇形・水頭症、脊髄脊髄の疾患、脳膿瘍のような感染症、また癲癇、パーキンソン病などもあるが、上記の2つが数の上で圧倒的である)。前回と前々回は脳腫瘍の手術例について書いたので、今回は脳血管障害の手術—その中でも特に「頭蓋外—頭蓋内(EC-IC)バイパス術」—を取り上げてみる。

血液・血管は人体にとって非常に重要なものである。心臓からポンプで送り出された血液が身体中にはりめぐらされた血管網を通して酸素や栄養を身体の隅々まで運び、循環してまた心臓に戻るという働きが支障なく行われることが、人体が機能する上での大切な基本である。脳は、とりわけたくさんの血液を必要とする。具体的にいうと4本の動脈で1分間になんと合計750ccもの血液が脳に送りこまれる。血液は首の左右両側にある2本の頸動脈と2本の椎骨動脈を通して脳に入っていく。頸動脈には内頸動脈と外頸動脈があり、頭蓋内に入っていく脳に酸素とブドウ糖などの栄養を運ぶのが内頸動脈で、一方主に顔面・頭皮などに分布していくのが外頸動脈である。脳内に入っていく血管(内頸動脈とか椎骨動脈)に狭窄が起きたり詰まったりすると脳の血流が不足し、一時的に麻痺を起こしたりものが言えなくなったりする。さらに詰まりが進行すると、そこより先にはもう血が通わなくなり、酸素欠乏で末梢の脳神経細胞が完全にだめになる。脳の神経細胞は酸素欠乏に弱く3分も酸素が行かないと死んでしまうのである。これが本格的な脳梗塞で、身体には完全な麻痺が起こったり失語症となって現れる。さらに意識障害が起こってくるともう重症である。

前置きが長くなったが、そこで症状がまだ軽いうちに、詰まった箇所には手を加えず放置して、健全な血管を他から借りてきて血管同士を縫って繋ぎ合わせる(吻合みみどうという)手術によって血管のバイパス(副行路)を作ってやり、脳の血流を改善して不足血液を補い、

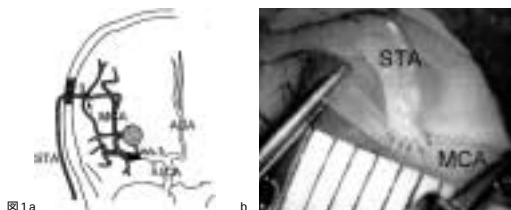


図 1 a 頭蓋外—頭蓋内動脈バイパス術の模式図:頭蓋骨右半分の脳血管透視図
浅側頭動脈STA、中大脳動脈MCAの枝。†は吻合箇所を示す。
b 実際のバイパス術の写真:浅側頭動脈STAと中大脳動脈MCAの枝を微細なナイロン糸
で繋ぎ合わせたもの。目盛りは1mmを示す。

脳梗塞を防ぐことが考え出された。ただ人体はなかなかうまくできていて、こんな手術をしなくても自然の作用で、詰まった部分をカバーするバイパスが気づかぬうちに形成されている場合があり、機能の脱落症状が現れないことがある。しかしこの作用にも限界があり、血流低下の程度が進むとやがては脳梗塞に陥る。

M女史に施行したこの「頭蓋外—頭蓋内バイパス術」は手術用顕微鏡を使うマイクロサージャリーによって以下の手順で行う。前述の外頸動脈の枝の一つである、脳の中ではなく、頭皮に栄養を運んでいる浅側頭動脈(こめかみで脈打っている動脈)をバイパス形成に利用するのである。その直径はわずか1mm程しかないのであるが、これをまず5 - 10cmほど剥離しておき、次に側頭頭頂部を開頭して脳を露出、脳内にある動脈の枝の血管(径1mm)をこれまた剥離して、2つを繋ぎ合わせるものである(図1)。吻合した直後は、この新しいバイパス回路を流れ始める血液量はまだ1分間あたり20ccにも満たないが、数週間経つと脳の需要に応じて100cc以上の血液を供給できるようになる。直径約1mmの血管を手術用顕微鏡下で25ミクロンの細さのナイロン糸を使って、吻合面を約8針で繋ぐのであるが、この大変微細で精密さを要する技術をマスターするためには、毎日毎日少なくとも3ヵ月間は実験室でトレーニングしなければならない。このような微小血管の吻合は技術がまずいと必ず詰まって用をなさないだけでなく、重大な合併症を起こすことになりかねないのである。この「頭蓋外—頭蓋内バイパス術」は1967年にチューリッヒ大学のYasargil教授(私の前任者)によって世界で初めて施行された。マイクロサージャリーと、このバイパス術を学ぶために当時世界各地から多くの脳神経外科医がチューリッヒを訪れ - 私もその一人であったが - 、その結果手術用顕微鏡を駆使した今の形のマイクロサージャリーが世界に定着したのである。

さてM女史の診断のところで出てきたモヤモヤ病は、1960年代の終わりに日本で日本の医学者によって発見されたもので、ウィリス動脈輪閉塞症とも呼ばれ、厚生省の難病特定疾患にも指定され研究されている稀な病気である。モヤモヤという名は東北大学脳神経外科の故鈴木二郎教授の命名で、それが国際的にも用いられているのである。この病気は、脳に栄養を運ぶ2本の内頸動脈の終末

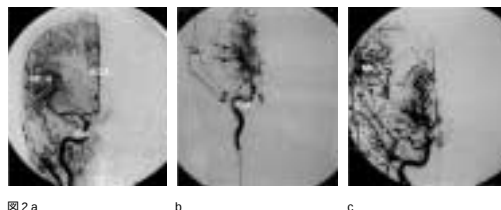


図 2 a 正常の脳血管造影正面図:内頸動脈ICAは頭蓋内に入ると中大脳動脈MCAと前大脳動脈ACAに分かれる。
b. モヤモヤ病患者の脳血管造影:†内頸動脈終末部の閉塞。††異常モヤモヤ血管。
c. バイパス術後の脳血管造影:浅側頭動脈STAを経て中大脳動脈MCAが造影されている。

部が、両方とも詰まりかけたり、詰まったりして血液の流れが不足することから症状が出るのである。その不足を補おうとして、脳の底部にある小動脈が、できるだけたくさんの血液を脳に送りこむべく最大限に拡張するという自然作用が起こる。脳の血管造影をするとその拡張した最小血管群が、あたかもタバコの煙のように見えるところからの命名である(図2)。しかしこの自然代償現象自体はまずよい作用であり、病因ではない。ネーミングから「モヤモヤすることが病気の本質」だと誤解しないようにしていただきたい。血液不足の結果、麻痺や失語症が起きることが問題なのである。その原因はまだ解明されていないが、発病する年齢が若く、10歳以前の小児と、30歳代の成人にピークが見られるということが示すように、動脈硬化が原因ではない。

モヤモヤ病のもう一つの特徴は、日本及びアジアに多く発生することである。最近の我々の調査では、ヨーロッパ人での発生率は、日本人発生率に比べて約1/10である。今から20年ほど前に当時7歳でモヤモヤ病の診断がなされ、京都でバイパスの手術を私から受けたY嬢はその後脳梗塞に陥ることもなく、比較的良好なQOLのもとに今日に至り、今でも正月や人生の節目に心穏やかに、すっかり美しい女性に成長した姿の写真を送ってくれる。

モヤモヤ病は小児期から若い年代にかけての時期に既に脳血管の閉塞とそれに伴う症状が出るのが特徴であるが、この時期をバイパス手術で乗り切ると、それまでに受けてしまった障害は若干残るものの、神経症状がそれ以上悪化することはないのである。本病は稀な難病であることもあり、ヨーロッパではこの病気の存在は知られていてもこれに詳しい神経内科医、脳神経外科医はまだほとんどいないので、各地で疑わしい患者が見つかったと私のところに診断の問い合わせがあり、さらには患者がチューリッヒまで手術治療に来ていたのが現状である。

脳血管が詰まる病気には、動脈硬化が原因のものがあり、この病気の方が洋の東西を問わず、はるかに頻度も高い。これもバイパス手術の対象になるのであるが、他の血行再建術も含めて稿を改めて紹介したい。

ワインに含まれる添加物

—ワインの安全性を考える—

横山 弘和



横山 弘和 / よこやま・ひろかず

1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。
88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在在商会業務室在籍。

前は、ワイン法によって守られているワインの質について触れましたが、今回はさらに具体的にワインの成分の内容について考えてみよう、ワインに含まれる添加物について取り上げてみました。

みなさんが酒販店でワインを購入するとします。ここで一番の関心は、そのワインの素姓でしょう。通常ワインの顔ともいうべきラベルから、そのワインの生産地名、生産者名、収穫年度などの事柄を知ることができます。さらにピンを裏返してみると、そこにも小さなバックラベルが貼られています。そのラベルを注意して見ますと、輸入業者名、住所、ワインの容量、アルコール分、そして「飲酒は20歳を過ぎてから」などの警告文が記載されています。そしてもう1つ、「酸化防止剤(亜硫酸塩)」の表示が目につきます。多くの人は、ワインのようなロマンチックな飲み物に化学成分が入っていることに驚くでしょう。

Sulphur dioxide(SO₂) < 二酸化硫黄、亜硫酸ガス >

亜硫酸は、古くローマ時代からワイン生産の過程で、硫黄を燃やして使用され、欠くことのできない成分とされてきました。現在もワインを生産する世界の国々で、酸化防止、殺菌などの目的で使用されています。それは最近評判の有機栽培によるワイン生産においても同様です。問題は、この化学物質を多く使用したワインを飲むと、人によっては頭痛の原因になることです。そこで、おいしい優れたワインを造ろうと努力する生産者は、その添加量を少なくするよう努めています。しかし、それにより有益な効果が薄れてしまうことも事実です。最悪の場合、ワイン本来の味さえ損なわれて、つかみどころのない代物になってしまう可能性もあるからです。

亜硫酸には、果汁やワインの成分の酸化を防止する作用と殺菌性があります。ワインの品質に悪い影響を及ぼすカビ、好ましくない細菌(酢酸菌、バクテリアなど)に対し作用します。ぶどうの皮に付着したカビを消滅させ、野生酵母の活動を止め、培養酵母の活動を活発にするのに役立ちます。

亜硫酸は普通、ぶどうをつぶす時点で加えられます。添加量は1ヘクトリットル当たり3～5グラムで、収穫されたぶどうの健康状態の善し悪しで変わります(状態が悪く腐敗のおそれが強いと2倍まで増やされます)。通常白ワイン、特に甘口デザート・ワインには添加

物が多く含まれています。しかし、市販のワインについては全て安全性が確認されていますので、赤ワインでも白ワインでも特に心配する必要はありません。

添加物と表示について

日本において許可されている亜硫酸の最大許可量は、トータルSO₂として、350ppmと規定されています。貯蔵中のワインの亜硫酸をたえず分析測定して不足量を補い、酒質を保護し、トータルSO₂の範囲内で品質管理をしていくことになります。一般のワイン中にあるトータルSO₂は、通常は最大許可量より少なく、50～100ppm程度です。この使用量をさらに少なくする努力が現在行われています。

参考までに、フランスを含めたEU国のワインに含まれるSO₂の最大許可量は

- ・ 赤ワイン 160ppm未満
- ・ 白、ロゼワイン 210ppm未満
- ただし、残糖分が5グラム/1リットル以上の場合は次のようになります。
- ・ 赤ワイン 210ppm未満
- ・ 白、ロゼワイン 260ppm未満
- ・ 極甘口ワイン 400ppm未満

特に白ワインの含有量が多いのは、白ワインは一般に酸化しやすい傾向にあるためです。アメリカでは日本と同様に350ppm未満とされています。

以前のワインは現在に比べるとずっと品質が劣るものでした。2世紀前半頃は、生産国フランスやスペインから輸出されたワインが小さな船にぎっしりと積み込まれ、はるばるイギリス海峡を経て当時から大消費国であったイギリスへ運ばれました。大きな波のうねりを乗り越えて運ばれたワインの多くは、振動や温度の差で色は濁り、味はすっぱくてそのまま売れる状態ではありませんでした。そこで当地のぶどう以外の果物ジュースと混ぜて、多少新鮮な飲み物に仕立てて販売されていたのです。その後、ワインの生産技術は徐々に改良され進歩しました。また運搬方法も近年著しく向上しました。現在のワインは、過去に比べると格段により扱いをされています。発酵活動中も、ワインが出来上がって熟成の段階でも、亜硫酸な



毎日ぶどうの糖度を測定し記録する

どの化学物質の助けを得て始めて販売できる品質となり、消費者が楽しめる嗜好品になるのです。もはや近代のぶどう酒なるものは、その昔、収穫された新鮮なぶどうを足で踏んで絞り自然に発酵させて造った純粋なその土地の飲み物ではなく、輸送に耐え得る品質にまで高められた飲み物となったのです。

添加が許されているもの

まず、収穫されたぶどうのマスト(果汁、果皮、種など)に添加が許されているものとして下記のものがあります。

- ・ 酵母の添加(ルヴウラージュ、levurage):発酵を起こす、もしくは促進するために酵母を添加すること。
- ・ 補糖(シュクラージュ、sucrageもしくはシャプタリザション、chaptalisation):ぶどうの糖分が少ないとき、アルコール度を増加させるために糖分を添加すること。ワイン生産地では、ワインとして認められるのに十分なアルコール度数を得るために、人工的に砂糖を加えることが許されています。糖分を添加する比率が厳しく制限されているにもかかわらず、規定を超えている例が稀にあります。もちろん、産地や収穫年によって糖分の追加が必要ない場合もあります。規定量は産地によって変わりますが、普通アルコール度数2%まで高めることができます。シャプタリザションは行き過ぎるとワインの品質に悪い影響を及ぼし、魅力の乏しいワインになってしまいます。
- ・ 硫黄の添加(スルフィタージュ、sulfitage):亜硫酸を添加することで異常な発酵、酸化を防ぎ、発酵をコントロールすること。最近ではだんだん控えめになってきています。これが頭痛の原因になると非難する人もいますが、実際に亜硫酸の助けなしで貯蔵したり遠地への輸送に耐えるのは困難なことです。

ときに酸味の強いジュースにはカリウムあるいは炭酸カルシウムを加え酸度を下げます。逆に酸味が低い場合は酒石酸を加え高めます。

ワインに関するフランスの法制度は世界中で最も厳格な法の一つであることは以前にも紹介しましたが、品質についての事故を防ぐよう、専門の特別取締委員会が常時品質のチェックも行っています。



1905年当時のブルゴーニュのワイン生産者たち

ブルゴーニュでは

今回のテーマであるワインと添加物について、ブルゴーニュ・ワインの品質、取り引きなどを取り締まる機関BIVB(Bureau Interprofessionnel des Vins de Bourgogne)に問い合わせをしたところ、下記のような返事をいただきました。

- ・ 現在ブルゴーニュには全体で約4,500のワイン生産者が存在する。
- ・ BIVBに所属するワイン醸造研究所によると、全てのワインが酸化防止剤を含んでいる。使われる薬剤は亜硫酸が、アスコルビン酸との併用である。これらはワインの酸化を防ぎ保存する目的で使用される。酸化防止剤は、一般には生産者によってワインが出来上がった時点で添加される。そのことにより、そのワインが輸出向けか国内消費かの区別なく、決まった割合を含有することになる。BIVB所属の醸造研究所は酸化防止剤を使用していない生産者を全く認知していない。酸化防止剤の使用は、生産者がワインの高品質を維持するために欠かせないことである。ただし、ピオロジック・ワイン(*)生産者の中には、酸化防止剤の割合を低く抑えたり、全く使用しないワインを販売しているところもある。しかし、それらのワインは酸化防止剤を使用したワインに比べ保存期間が短くなる。

ワインと添加物は切っても切れない関係です。しかし、あくまでワインの高品質を維持するために使用されているものであり、厳しい取り締まりのもと、適正使用量が管理されています。消費者のみなさんも、正しい知識を持つことで不必要に警戒心を抱くことなく、楽しくワインとつき合っていたいただきたいと思います。

(*)有機栽培のぶどうによって造られたワインのこと。

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世が、ほだに恵んでいるブルゴーニュへいらっしゃいませ。
種上の純潔を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、
中世そのまの街並み、美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力がはだの心(こ)ろを感じる地方、
それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
(株)左多商会業務室 担当: 岩沢
Tel. 03 3582 5087

